

論文の内容の要旨

論文題目 「子ども」を語る社会の成立と変容
—近現代日本における子ども・教育・社会—

氏 名 元 森 絵 里 子

本稿は、近現代日本の教育の文脈において、「子ども」をめぐる言説とその変容を記述する試みである。

社会史の知見によれば、「子ども」は歴史的な観念である。大人ではないが将来大人になる「子ども」、それに配慮すべき「大人」、子どもが将来担う「国家」「社会」といった一連の観念は、学校教育という制度を伴いながら、歴史的に立ち現れてきたものである。そのため、この子ども・教育・社会の結びつきを自明かつ重要なものと見なす言説が繰り返されるが、近年では、そういった言説を問い直そうという動きもある。そこで、本稿は、子ども言説が成立し揺らぐ様を具体的に描き、私たちにとって「子ども」とその教育とは何であるかを考察することとした。

序章では、以上の問題意識を提示した上で、先行研究の検討と本稿の枠組みの提示を行った。子どもや教育に関する研究の多くは、教育史や教育社会学の歴史研究、社会学の理論といった、既存の言説から距離をとりやすいと思われるものも含めて、子ども言説に巻き込まれる傾向があった。子ども・教育・社会の結びつきを、実現すべき理想や、通時的で客観的な議論の前提と見なしてしまっているのである。

その中で、ルーマンが、一般システム理論において、「子ども」という観念とそれと諸観念の結びつきとを非自明化しつつ、教育言説の内部では、「子ども」という想定こそが教育言説を産む鍵となっていると指摘している。この議論は、子ども・教育・社会の結びつきを、その歴史性・構築性を視野に入れて議論できる有用なものである。ただし、本稿はさらに、「子ども」とされた側のフィードバックを考慮する必要があると考える。というのは、教育において、「子ども」はしばしば、自らについて語ることを奨励されているからである。

子どもは「子ども」と扱われる中で語り、ときには子ども自身が「子ども」に関する言説を自明のものとして用いたりもする。したがって、子どもの言葉がさらにフィードバックとなり、大人の言説を展開させる面があると考えるのが妥当である。

以上の考察を踏まえ、本稿は、子どもや教育を語る言説の歴史的な変容を、「子ども」に関する前提を置かず、具体的な資料から再構成することとした。その際、諸言説の論理に矛盾や破綻、語られていることを裏切る言葉と言葉の関係性を見つけ、それが言説内で処理されたり問題として発見されたりする様に注目した。加えて、「子ども」とされた存在がどのように「子ども」を語っているかを検討した点が、本稿の最大の特徴である。子どもの言葉と大人の言葉の関係性が、語られている子どもと大人の関係と一致したりずれたりする瞬間を同定し、言説上の子どもや教育と異なったそれらのあり様について考えた。これらの作業により、「子ども」をめぐる言説の歴史性や構築性を明らかにし、言説の変容をその機制とともに記述する。

第Ⅰ部『『子ども』を語る社会の成立』では、戦前期に、学校教育制度の成立に並行して、子ども・教育・社会が結びつき、私たちの見慣れた子ども言説が繰り返されるようになる様を示した。

第1章では、綴方教育論を題材に、「子ども」とはどのようなもので、それに大人がどう配慮すべきかが、どう語られてきたかを通時的に分析した。まず、世紀転換期に、「子ども」固有の特徴やそれへの配慮の必要性が論じられ出す。そして、1920年代にかけて、「子ども」の大人から見えない「内面」や「生活」が発見され、子ども自身に内省させることでそれを大人が把握し教育目的を達成するという教育方法論が現れる。これによって、多様な子どもを許容しつつ、子どもとそれに配慮した教育は重要だと語り続けられるようになった。また、これ以降、「子ども」とその教育方法をめぐって、放任か指導か、子どもの尊重か統制かといったアンビバレンスが、教育言説において繰り返し問題とされるようになる。

第2章では、綴方教育論やその他の教育論から、「子ども」とその教育に「国家」「社会」が結びつく様を明らかにした。第1章で見た変化に並行して、現在の大人とは異なった「子ども」の教育に、未来における「国家」や「社会」の創出や改良が期待されるようになる。このイメージは思想的立場を超えて共有され、「社会」像の議論において、子どもと教育が重要な焦点となり出す。

第Ⅱ部『『子ども』を語る社会の揺らぎ』では、子ども・教育・社会をめぐる言説の、戦後から現代にかけての変容を、その機制とともに記述した。

第3章では、戦後から1980年代の、子どもや教育の「問題」に関する言説の変化を分析した。戦後は、子どもの教育が社会をよくすると強く信じられ、教育の改良が未来の鍵と考えられていた。ところが、70、80年代には、子どもや教育は社会の変化に対応すべきものとされ、その問題がさかんに語られ出す。「子ども」は、教育領域において、「社会」の成立を想像させる「想像力」であったと言える。人々が過去を否定して未来に期待した戦後には、この想像力が希望をもたらし、その後、この想像力が子どもや教育の問題を発見させるように働いたと考えられる。

第4章では、1955年から1985年の中学校生徒会誌94冊から、「子ども」とされた側の子ども・学校・社会に関する言説とその変容を分析した。子どもにとっての子ども期・学校期は、大人と同様の時代認識の変化とともに、保護された期間、社会化の期間、仲間内のコミュニケーションに閉じた時期と変化している。さらに、この結果を第3章の大人の言説の変化と比較すると、戦後は、子どもの言説が大人の子どもや教育への希望を強化していたのに、後に、大人の不安を助長する関係になったことがわかる。また、子どもの言説と大人の言説、語っている子どもと大人の関係性から、子どもと大人、教育と社会の関係が、言説の内部で語られているものとは異なっていることが示唆される。

「子ども」とは虚構^{フィクション}である。しかし、学校教育という制度=場を媒介に、実体化される擬制^{フィクション}である。学校教育という制度=場、「子ども」のフィクション性、「子ども」という想像力の相互依存的、循環的な関係性に、大人も子どもも巻き込まれる中で、「子ども」は語られているのである。

ただ、近年は、子どもや教育の問い直しがされ、「子ども」をめぐる言説は多様化している。子どもの権利論、ポストモダンの思潮、新自由主義教育改革論などの中で、子どもや教育を高度に反省する言説もあれば、子どもの尊重や教育によるよりよい社会の実現といった素朴で旧来型のスローガンを語り続ける言説もある。また、改革が実行されることで、学校という制度=場そのものも変化しつつある。

そこで、第5章では、1983年から2006年の「毎日中学生新聞」の読者投書欄で議論される悩みや問題意識から、「子ども」にとって、「子ども」や教育の問い直しがどこまで進みうるかを考察した。子どもは、子ども期や学校教育、80年代以降意味を強める仲間内のコミュニケーションを問題化し、「自己決定」「自分らしさ」という価値で問い直したりもする。ただし、「自己決定」「自分らしさ」は、既存の子ども・教育・社会の像を選ぶことを含みうるため、「子ども」も教育も未だ否定されきらない。

「子ども」というフィクションは、その虚構性への反省がなされつつも、学校教育という制度=場と結びついて、未だリアルであり続けている。その中で「子ども」であることは、ときに楽しくときに息苦しいものとなっている。

第Ⅲ部『『子ども』を語る社会で／を語るということ』では、現時点で、「子ども」をどう語り、子どものための場をどう設計するかについて考えた。

第6章では、プレーパークという子どものためのオルタナティブな場づくりの運動の、参加者へのインタビュー記録を分析した。プレーパークは、子どもと大人の差異を局所的に宙吊りにし、「自分の責任で自由に遊ぶ」という理念を実現している。また、その場を支えるオルタナティブな大人像や、そのような人々のつながりのうちに現出する社会性のあり様を語っている。しかし、「子ども」をめぐる諸観念を攪乱する実践であるプレーパークも、場を維持するために経済、法、政治という制度上で「主体」になれるか否かという点において、「大人」と「子ども」の区分を自明視していることも明らかになった。

この知見は、「子ども」やそのための制度の必要性は否定しがたいということと同時に、それが、「子ども」が重要だからでも「社会」の成立に不可欠だからでもなく、他の個別の諸制度領域との関係によるということを示している。したがって、教育的な言説とは別様

の「子ども」や社会性の語りがありえるし、子どもの処遇の場も、プレーパークのような場も含めて、多様に構想しうると考えられる。

終章では、全体をふり返った上で、本稿のインプリケーションを述べた。第一に、「子ども」をどう語り、どう処遇したらよいかを考える際に、第6章で見たような否定しがたい最小限の意味を超えた倫理的、哲学的、社会的意味を、「子ども」やその教育に求めることは必要かという問いを引き受けていく必要があると指摘した。第二に、「子ども」をその鍵とする全域的＝全体的な「国家」「社会」とは、「子ども」という想像力が見せた夢にすぎないことも指摘した。この特に戦後に強く信じられた社会像が妥当かを、私たちは考える必要がある。

なお、子ども・教育・社会に関する言説の変容とその機制を記述した本稿は、子ども言説内で語られる「国家」「社会」とは異なった意味で、私たちの社会性の歴史を記述する試みでもあった。